

2023
第
44
号

紅

京都大学広報誌
くれなゐもゆる

萌

特集

変化の時代を生き抜く大学・企業の
運営と経営

産学連携から描く未来



変化の時代を生き抜く 大学・企業の運営と経営

産学連携から描く未来

技術革新と価値の変化が目まぐるしい現代社会において、
未来を見据えて行動を起こすことは簡単ではない。
グローバルな価値観も伝統の変革と刷新を迫ってくる。
現代の課題や社会の要請に応えることは大学に課された大きな責務だ。
大学という社会的機能と役割を未来にどう受け渡すか。
産学連携やグローバル企業の実践例から
変化の時代を生き抜く人づくり・組織づくりのあるべき姿を考える。



湊 長博
第27代
京都大学総長

家次 恒
シスメックス株式会社
代表取締役会長 グループCEO

野崎 治子
京都大学理事
(広報担当)

湊●先日の報道によると、家次会長が社長在任中にシスメックス社の時価総額が約32倍になったそうですね。ものすごい数字だと思います。しかも、会社はどんどんとグローバル化している。このような成果をあげられた秘訣は何だったのでしょうか。

家次●私もシスメックスは、血液検査に関する装置を開発・生産・販売する事業からスタートしていますが、血液検査は一人につき、一検体となりますので、マーケットの潜在能力は人口に比例する。世界規模で考えると現在は80億。しかし、日本の人口は減っていくなかで、成長を維持するには海外展開が必然でした。

もう一つは、お客様に製品を直接販売してきたことがよかった。ユーザーの視点は技術開発・改良に不可欠ですが、代理店を介するとお客様からのフィードバックも代理店経由になります。ですから、市場を世界に広げるときも、直接販売するルート開拓に力を尽くしました。

企業がグローバル企業かどうかを分ける重要なマーケットがアメリカです。規制が厳しくシェアを伸ばすのは難しいのですが、様々な幸運が重なり、直接販売・サービスを展開できたことは、会社の成長の後押しになりました。それに、EUが誕生

して経済圏がひとつになり、中国でも漢方薬などを使う東洋医学から西洋医学への転換が進むなどの流れに乗れたのも幸いでした。

野崎●社内のダイバーシティ推進の戦略も素晴らしいですね。2009年には研究開発拠点に社内託児所を設置されていますし、博士号取得者や外国人の採用にも積極的に取り組んでこられました。

家次●バイオ系の分野は女性の従業員の割合が多いですから、当然といえば当然のなりゆきでした。結果的にグローバル化の方向性に合っていますね。

組織のトップにあるべき姿勢

湊●以前に私の研究室で、シスメックス社と免疫関連の共同研究を実施させていただきました。すると、開始早々ほんの1年ほどで、御社の若い研究者がもう論文を仕上げてくださいました。内容もとてもロジカルで、ずいぶん優秀な研究者がおられるんだなあ、と感心したものです。

家次●シスメックスは、医療機器の製造を手始めに血液検査やその解析、ゲノム医療などの分野に事業を展開してきました。転機となったのが、ライフサイエンスへの挑戦を目

指した2000年の中央研究所の開設でした。このときに神戸大学学長を退任されたばかりの西塚泰美先生(故人)に、名誉顧問としてお越しいただきました。

西塚先生は京都大学医学部を卒業され、医学部助教授から神戸大学に移られていました。生命現象の調節機構やがん化機構を明らかにされた方です。こうしたつながりを契機に、医薬や生物学の研究者の関心を集めたことが大きかった。

野崎●西塚先生は文化勲章を受章された医学界のビッグネーム。今日で言う、インフルエンサーですね。

家次●こう振り返ると、コツコツと取り組んできたことはもちろんですが、世の中のニーズと人材をうまく捉えてきたのでしょうか。

湊●とはいえ、誰でもがそういうチャンスを手にするわけではありません。トップの力量が大きかったからでしょう。

家次●私は、「おれはツイてるから大丈夫や」、「社員が心配しているときには、トップが不安そうな顔をしてはいけな」と、よく言っている。

湊●私が長年一緒に研究してきた本庶佑先生も、「おれは引きが強いから大丈夫だ」とよく言っておられました(笑)。そう言われると、周り

紅崩 第44号 目次

- 02 巻頭鼎談
変化の時代を生き抜く
大学・企業の運営と経営
産学連携から描く未来
- 08 授業に潜入! おもしろ学問
移り変わる農村のあり方。
21世紀の新たな農村の価値を描く
小島泰雄
- 12 研究室でねほりはほり
大発見の鍵は〈現場主義〉にあり。
薄くて曲げられる太陽電池への
熱い期待 若宮淳志

- 16 私を変えたあの人、あの言葉
どこを切っても
競技かるた一色の大学時代
山添百合
- 17 京大DEIナビ
全ての学生が、学ぶ意欲を
発揮できる大学に
- 18 輝け! 京大スピリット
令和4年度京都大学総長賞
第15回京都大学たちばな賞

- 20 京都大学基金事務局より/
京都大学同窓会だより

表紙の解説●ペロブスカイト太陽電池
フィルムや薄いガラスの上に、ペロブスカイト結
晶構造を持つ化合物を塗布した太陽電池で、薄
くて軽く、曲げることもできる。さらに、太陽光を
エネルギーに変換する発電効率も高く、化石燃
料に代わる新たなエネルギーとして期待される。
(詳細は12ページ「研究室でねほりはほり」に)

は不思議と安心するものですね。

野崎●厳しい環境のときほど明るく前向きであるということは、組織やチームを率いるうえで大切なことだと思います。

家次●私どもの事業にも本庶先生に関わっていただいていますし、京都大学元総長の井村裕夫先生には「神戸医療産業都市構想」*1の実現にご尽力いただきました。人と人との連携、研究成果と企業活動とが生み出す力に、助けられています。

湊●御社に出資いただいて経営管理大学院で「シスメックス寄附講座」を開講できたように、大学と産業界の連携はいつも新しいパワーを生み出します。神戸医療産業都市構想では、大学、企業、医療機関などが組織を越えたクラスターを形成しています。そうすることで共通の課題が見つかり、分野横断的な研究がさらに活発になります。

家次●日本の技術力や研究力は、他国に比べると弱まっています。国、都市、企業・大学、それぞれが自分たちの持つ強みをしっかりと考え、協働して世界に打ち出すことが重要です。

現代はオープンイノベーションの時代。全てを自分たちだけで取り組むのではなく、協働することで研究や開発のスピードを上げていこうということです。専門性を磨いて尖ったものを作り、自分たちだけの価値が生まれれば、協働したい人、働きたい人など、自ずと優秀な人が集まってくるはずですよ。

組織の「ブランド力」をいかに高めるか

湊●先般、主要国の大学学長と意見交換を行う会議に参加しました。そこでユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの学長が、国際的な競争力が求められる大学にとって重要な課題と武器は「アイデンティティをいかにはっきりと

示すかだ」と話しておられました。

家次●いわゆる「ブランド力」をどう示せるかだと思うのです。技術力はもちろん、デザイン力や広報力も重要な要素です。自分たちの強みを明確に示して他との差別化をはかることができれば、他社や他機関との連携も生まれやすい。

湊●自分たちで、「うちのここがすごい」と思っているだけでは、先には進みません。それを社会に伝わるよう発信することが必須です。

広報という点では、広報担当の野崎理事は京都大学を卒業後、企業で活躍してこられました。常勤理事を企業からお迎えするのは、野崎理事が初めてでした。

野崎●総長から求められているのは、「大学に違和感を覚える」ことだと理解しています。

湊●「大学内の常識が、世間では非常識」、そういう事例はたくさんあります。けれども、内部にいるとそのことになかなか気がつかない。

野崎●私の仕事は、大学に「なぜ？」



みなと・ながひろ●

1951年、富山県生まれ。専門は医学(免疫学)。京都大学医学部卒業。医学博士。京都大学大学院医学研究科長・医学部長、京都大学理事・副学長、プロボストなどを歴任。本庶佑特別教授との長年の共同研究は、新しいがん免疫療法として結実し、本庶特別教授の2018年ノーベル賞受賞にもつながった。



経営管理大学院経営研究センターの主催、シスメックス寄附講座の共催で開催された「ビジネスフロンティアセミナー」での、家次氏の講演。環境の変化を先読みして多様性をもって社会課題解決に臨むサステナブル経営についての話題を中心に、聴講生に熱いメッセージを投げかけた。京都大学では、現在、医学研究科や工学研究科などの11の部局に39の寄附講座を開講している

*1 神戸医療産業都市構想

1995年に発生した阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸の経済を立て直す、震災復興事業として開始。神戸市にある人工島「ポートアイランド」に先端医療技術の研究開発拠点が整備され、現在は、約370の先端医療の研究機関や高度専門病院群、企業や大学の集積が進んでいる。



シスメックス株式会社の創立40周年を記念して2008年に拡張した研究開発拠点「テクノパーク」。2000年に開設した中央研究所を母体に誕生。社内託児所「キッズパーク」(写真下)を設けたほか、研究員や顧客に日本文化に触れてもらおうと茶室や日本庭園をしつらえるなど、新たなアイデアの創出を育む工夫が凝らされている



いづつぐ・ひさし●

1949年、大阪市生まれ。京都大学経済学部卒業。三和銀行(現三菱UFJ銀行)入行。1986年、東亜医用電子(現シスメックス)入社。1996年に社長、2013年からは会長を兼務、2023年から現職。2022年まで、神戸商工会議所の会頭を務めた。

と問いかけること。それに、当たり前すぎて見逃されている「良さ」を再発見すること。よそ者の視点でこれらを見つけないことだと思っています。

例えば、京都大学は、研究者はもちろんですが、優秀な職員が多いです。最初は縦割り意識や前例踏襲なども目に付きましたが、だんだんと良いところが見えてきます。彼らが持つ仕事への誠実さ、潜在能力に、「大学経営」の視点が加われば、もっと力を発揮できると思うのです。今は、各部署を回って管理職に人材育成での課題や取組事例を伺い、良い事例を全学でシェアする仕組みづくりを進めています。

家次●「大学経営」という言葉が出ましたので言葉を濁さずに言うと、基本的に国からの交付金でやり繰りする日本の大学のビジネスモデルは明治時代から変わっていない。DX化や人手不足などの問題が加速

するなかで、時代遅れとも言える部分をどうアップデートしていくのか。これは企業が今、頭を抱えている問題です。

湊●仰るとおりです。旧制帝国大学から新制国立大学に変わってから既に70年余り、この間の大学の仕組みは驚くほど変わっていません。

家次●一つ思うのは、大学は自主財源をもっと確保すべきだということ

です。予算が下りるのを待つのではなく、自ら調達することで、独創的な研究もさらに活発になるはずですよ。

湊●大学と経営を同列に考えることは、これまであまり歓迎されてこなかったと思います。しかし、自分たちが大学に本当に必要だと考える資金は自分で調達するという視点も必要でしょう。研究や教育にもっと自由に取り組むには外部資金



家次氏が大学時代、葵祭に参加した際の一枚。後列右端が家次氏

の更なる確保が必要です。このことは私も言い続けています。

自主財源という意味では基金の獲得も一つです。例えば、iPS細胞研究基金にしても、少額からの寄付が可能で、たくさんのご支援をいただいております。技術の強みを社会に伝えて支援を集め、社会に還元していく、というプロセスを確立していきたい。

組織そのものの変革も必要です。それなしでは、この先の大学運営は立ち行かなくなると考えています。

野崎●総長の危機感に、私も共感しています。母校の変革期に当事者の一員として参画できるのは名誉なことであり、自分なりに貢献したいと思います。

若者の意欲が 研究の未来を創る

湊●高等研究院には、家次会長が代表理事を務めておられる中谷医工計測技術振興財団*2から研究助成を受けて、「医学物理・医工計測グローバル拠点」を設置しています。財団に、物理学と臨床医学の融合研究というテーマに興味を持っていただいたのがきっかけでした。

家次●財団は、2024年に設立40周年を迎えます。日本の技術力や開発力の向上に寄与し、もっとイノベーションが生まれる土壌を育むために一石を投じて、ひいては日本が元気を取り戻すことを願って「神戸賞」を創設しました。神戸賞の特徴は、バイオメディカル・エンジニアリング分野の若手日本人研究者を表彰することです。ただし、賞金を渡して終わりにするのではなく、研究の発展に欠かせない継続的なサポートとして、研究資金を5年にわたって助成します。若い研究者の励みとなる賞に成長することを理想

としています。

湊●国内の研究者の成長をどう担保するかは、優秀な人材を社会に輩出する使命を担う大学にとって大きな課題です。企業ではどのようにして若手のモチベーションを向上させておられますか。

家次●先端的な取り組みにチャレンジする姿勢を、若い人たちに見せることでしょうか。また、企業での働き甲斐の一つは、お客様の喜ぶ姿が見えること。これらが大きなエネルギーになると思います。

湊●ハーバード大学のマイケル・サンデル教授は、「労働の本質は自分の仕事を他者に認めてもらうこと、そして敬意を払ってもらうことだ」と言っておられます。自分のやっていることが、人々から必要とされていると実感できることが、欠かせないと思います。

家次●若い人たちには潜在能力があります。これからの労働は、AIへの代替が進むと思います。しかし、その一方で、人間にはどんな良さがあるのか、それをどう磨くのかという視点を忘れてはいけません。

野崎●AIに使われるのではなく、使いこなせないといけませんね。

家次●新しい技術の誕生は、若者にとって新たな挑戦の機会を与えてくれます。知的ハングリーの精神を育て、もっと存在感を出してほしいですね。

学生時代に育んだ 人とのつながり

湊●家次会長が京都大学に入学された頃は、大学紛争の真っ只中でしたか。

家次●そうです、ストライキで授業がなかった。だから、友人たちとたくさん議論しましたね。

湊●私も同じ時期です。本を読んだ

り、友人とどこかで一日中話したりしていました。

家次●本を読んでいなければ議論できませんから、読書もたくさんしましたね。

湊●そうです、吉田界限全体が、そのような雰囲気でした。

家次●学期の途中から、北白川で下宿を始めました。北白川周辺には理学部の学生が多くいました。また、大学紛争で東京大学の入試が中止になった影響で、関東の学生も多かった。下宿を通して出会った多様な人とのつながりは、人生の宝になりました。

湊●京都大学卒の経営者やリーダーのお話を伺うと、勉強以上に友人との思い出を語る人が多いですね。私もそういった方々とのつながりがこの齢になっても続いています。ですから、お話は実感としてよく分かります。

野崎●私は、アメリカンフットボール部のマネージャーをしていました。監督は、「マネージャーの仕事は、ユニフォームの洗濯ではない。選手が自分で洗濯するように環境を整えることだ」と仰った。それで、全自動洗濯機を調達すべく、OBに寄付を募ったりしたものです。

湊●学生日本一に輝く、黄金期前夜ですね。

野崎●アメリカンフットボール部を日本一に導いた水野彌一さんが監督に就任したばかりでした。将来に向けての新人部員のリクルートや施設の整備、コーチングスタッフの育成など、将来に向けた人づくりと組織づくりに走り出した頃でした。先輩や後輩との関係は今も続いていて、偉い立場の人になっていても、あの頃の感覚で呼びあえる(笑)。

卒業して就職した先は京都大学のOBが学生時代に創業した会社

で、社是は「おもしろおかしく」。この精神のもと、どうすれば社員と企業との信頼関係を深められるか、人の気持ちと多様な能力を生かす組織や仕組みはどうあるべきかという仕事をしてきましたが、その原点は、大学時代にあったのだと思います。

家次●私も、「このことは、あの人に聞いたら分かるかもしれない」と思える人たちにたくさん出会えましたね。

野崎●大学には「エースで4番バッター」とでもいうべき優秀で尖った、ちょっと風変わりな人が多くいました。自分にはない発想をする人や才能豊かな人たちと交流することで、「こんな人もいるんだ」とつながっていく。そうして、他人をリスペクトしながら、自分の良さを振り返ることもできる。

この頃の若い人たちは横並び意識が強く、自信がないといわれますが、ちょっとしたきっかけで大きく変わります。研究テーマのディスカッションや将来のキャリアの相談相手となって背中を押してくれる先輩や先生、仲間たちとたくさん出会え

る京都大学であればよいですね。

湊●京都大学には、学生を型にはめないという伝統があります。それが結果的に、面白い多様な人材が育つ土壌になってきたと思います。

野崎●「京大生にロール・モデルはいらない」、「自分にとって自分自身がロール・モデル」というのが私の持論です(笑)。

ゴールの設定は具体的であるべし

家次●経営とはゴールの設定ではないかと考えています。どこにゴールを設定して、そこまでどうやってたどり着くのかを若い人たちに考えてもらいたいと思っています。

変化の大きな時代には、常に複数の流れがあります。どの流れにどう乗るか、その潮流を見極めるのも経営の仕事です。上手く流れに乗れば、自分で舵をとるよりもずっと速く進む。だけど、下手をすれば逆流してしまう。

湊●とても論理的ですね。会長専任になって視点は変わられましたか。

家次●現代は、政治的にも複雑な時代です。その中で企業をどう存続させ、どう成長させるのか。これを考えると止まらない(笑)。

湊●これまでの大学の目標と言えば「世界に輝く」など修辭的なものを掲げがちでした。ですが、家次会長が仰るようにもっと具体的に考えていくことが必要ですね。一朝一夕に変化は起こせません。例えば10年後にどこを目指すのか。10年かけてどのように組織を変えるのか。そのために必要な資金はどれだけか。このように具体化して検討すれば、「歩み方も変わるはずだ」と信じています。

本日はお忙しいなか、ありがとうございました。これからも折に触れてご助言いただければありがたく思います。

実施日 2023年8月3日(木)
場所 京都大学 総長応接室

*2 中谷医工計測技術振興財団
シスメックス株式会社創業者の中谷太郎氏が1984年に設立。医工計測技術の広範な発展を推進し、社会および生活の向上に寄与することを目指して表彰事業や研究助成、奨学金給付などの事業を実施。



アメリカンフットボール部の同窓生との食事会での一枚。大学時代の先輩・後輩との関係は今も変わらず続いている

のざき・はるこ

1978年、京都大学薬学部卒業。株式会社ホリバコミュニティ入社。1980年に株式会社堀場製作所転籍、以降人事教育部長、管理本部人事担当副本部長、ジュニアコーポレートオフィサーを務める。2022年4月から現職。西日本旅客鉄道株式会社社外取締役、積水化学工業株式会社社外取締役も務める。



授業に潜入!

おもしろ
学問

人文・社会科学科目群／地域・文化
人文地理学各論Ⅱ(村落)

小島泰雄 教授 人間・環境学研究所

移り変わる農村のあり方。 21世紀の新たな農村の価値を描く

「農村」という言葉から、どんな風景を想像するだろうか。

その名の通り、「田畑に囲まれた、農業をする場所」という印象で語られがちだが、蓋を開けてみると、日本では農業で生計を立てる人はそれほど多くないのが実情。のどかな移住先、慣れ親しんだふるさと、第二の人生の拠点……。土地利用や人口移動のデータを片手に、農村地理学的手法で農村を眺めると、多面的な農村の価値が浮かび上がってきた。

小島 まず、皆さんに問いかけてみましょう。「農村に住んでみたいですか」**(①)**。

学生A ● ぼくは「どちらかというに住んでみたいと思わない」です。都市から離れた場所で暮らしてきましたので、不便だという気持ちが強いです。

学生B ● 行きたいイベントの開催は都市部が多いので、「住んでみたいと思わない」。田舎からは行きづらい。

小島 都市の快適さや利便さは手放せないのですね。

② は約1,100人の都市住民に、農村への定住願望を尋ねた2014年の世論調査の結果です。定住願望が「ある」は31.6%、「ない」は65.3%



です。2005年、2021年の結果でも、約4分の1の人たちは農村に住んでもよいと思っていることが分かります。

では、「農村」とはなにか。そして「農村に暮らす」というとき、どんな印象を私たちは持っているのか。これを今日の授業を通して考えます。まずは、他国の例を見ながら、日本の事例を相対化していきましょう。

③ は、1971年のイングランドにおける農村住宅区分です。イングランドにはロンドン、バーミンガム、マンチェスターという大都市があります。この3都市を結んだ距離は、日本に置き換えると名古屋、神戸、岡山ほどの距離。狭い範囲に都市部が集中しているのです。

区分の内容を補足すると、「漸移的な農村住宅」は特徴を決めきれない、多様な人たちの暮らす地域です。「軍の住宅」というのは基本的に借家。軍や農業労働者は借家住まいが多いです。「高級な持ち家」は、弁護士や会計士などの専門職が多く、大都市周辺に分布しています。「地方公営住宅」は工業従事者が多いです。1971年のイギリスの産業は、工業が衰退してゆく時期です。

学生C ● 大まかな傾向としては、都市部の周りに高級住宅と軍の住宅、



こじま・やすお
1961年、広島県に生まれる。京都大学大学院文学研究科博士後期課程を中退。神戸市外国語大学教授などを経て、2011年から現職。研究テーマは中国農村の生活空間の変遷。

公営住宅があり、その周縁に農業関係の区分が分布しています。

小島 さらに細かく見ると、都市部に近い農家は持ち家率が高く、周辺になるほど借家率が高いことが読み取れます。

Dさんは、日本の農村を想像するとき、借家と持ち家についてどんな状況を思い浮かべますか。

学生D ● 農村は都市よりも土地代や家賃が低いこともあって、借家よりも持ち家の一軒家が多いイメージです。

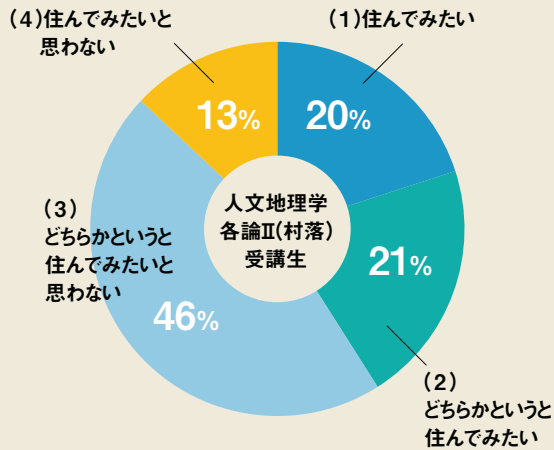
小島 日本は戦後に持ち家政策を推進しましたから、持ち家率の高い社会です。現在、日本で農村移住を考える人たちの悩みの一つが、農村に借家がないことだそうです。

一方で、イギリスの農村は借家が多い。農村の借家に農業従事者以外の人が入ってきているのですね。借家の存在が、イギリスの農村居住の多様性を生み出しています。

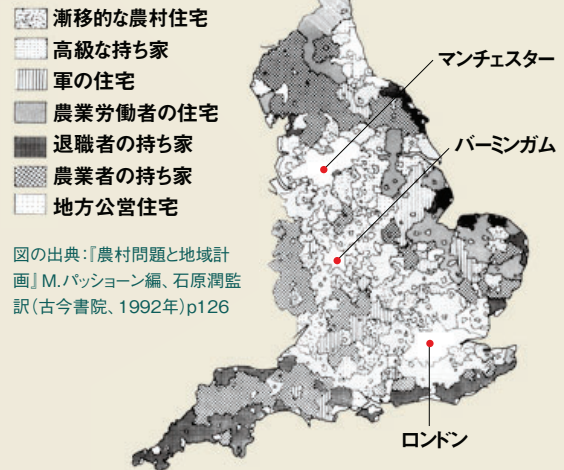
70年代の欧米で発生した「反都市化」

次はアメリカの例を見てみましょう。1960年から1973年のデータによると、この時期、アメリカの総人口は増えています。大都市圏、非大都市圏、農村の人口増加率に注目すると、

① Q.農村に住んでみたいですか？

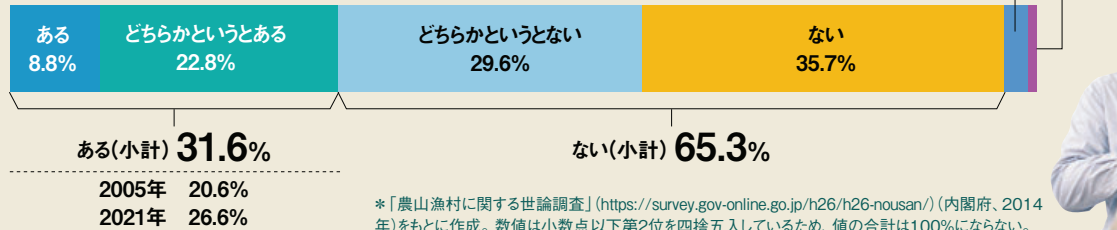


③ 1971年のイングランドにおける農村住宅区分



② 2014年度 内閣府世論調査 都市住民の農山漁村地域への定住願望の有無

1,147人



*「農山漁村に関する世論調査」(<https://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-nousan/>) (内閣府、2014年)をもとに作成。数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、値の合計は100%にならない。



1960年代は農村から大都市圏に人が流入しましたが、1970年代には農村にも人がどんどん移入しています。ちなみにこの時代のアメリカ社会は、都市への集中が落ち着いてきた時期です。日本と照らしてみると、どんな違



いがあるでしょうか。
学生E ●日本でも、高度経済成長期の都市の過密状態や、バブル崩壊などの経済状況を理由に、都心から人が移ることは想像できます。ただ、農村にこれだけの人が移る理由は分かりません。
小島 近代は都市化する社会だと考えられていた時代に、それとは異なる人口変動が発生したのが1970年代です。これを当時の地理学者たちは「反都市化」と捉えて、一時的なものか継続するのか、議論しました。しかし、1980年代に入ると、アメリカでは再び都市が成長します。
 一方で、1980年代のヨーロッパでは、この動きが続きました。データによると、農村地域の人口の増加率に比べて、都市地域の増加率は低いです。

とはいえ、農村に人が移っているのは確かですが、農村から農村に移ったのか、海外から来たのか、都市から農村に移ったのか、その内訳はデータからは読み取れません。
 そもそも、人が動く・移るとはどのようなことでしょうか。大学進学や就職は大きな契機になりますね。なんにせよいろいろな思いがあって引越するはず。多様な動機があるなかで、都市から農村に向かう動機はなんでしょう。
 イングランドの移住理由は様々で、都市での暮らしが難しくなったという経済的な理由や、退職、健康面の考慮、帰郷、コミュニティづくりなどがあげられます。それから、農村に憧れる中間層の移住も多いと想定されています。心地よく暮らせる場所を求めて移るということですね。



学生F ● 私は農村に住んだことがなく、これからも農村移住を考えていない立場ですが、農村というと、ストレスフルな社会を離れて都市の喧騒から離れられるというよさを想起します。

小島 都市のことはよく知っていても、農村というと皆さん、なにか固定されたイメージがあるのではないのでしょうか。Fさんがおっしゃったような「牧歌的な農村」に憧れて移動するのではないかという議論は、「反都市化」が盛り上がった1970年代にはよく言われました。でも、実際の移動理由は多様。どうも憧れだけではなさそうだというのが現在の認識です。

国ごとの相違もあって単純化はできませんが、いずれにせよ欧米では「反都市化」の動きが見られる時期がありました。ですが、これまで日本ではこの動きはないとされてきました。しかし、近年、変化の兆しがあります。これを「田園回帰」という言葉で考えていきます。

2010年代に生まれた「田園回帰」の動き

小島 「ふるさと回帰支援センター」を知っていますか。東京都心にある施設で、地方自治体の担当者が「移住しませんか」と、地域の魅力をアピールするセミナーなどを開いています。データによると、2008年の来訪者は年間1,800人でしたが、2014年には

10,000人を突破し、増え続けています。セミナーの開催件数も2014年以降、急激に増えています。

学生G ● 知名度が上がったのでしょうか。

小島 確かにそれは重要ですね。一方で、社会の変化の反映だとすると、2010年代にどんな変化が起きたのでしょうか。

学生G ● ふるさと回帰への支援が手厚くなったのかも。

小島 「田園回帰」という言葉は政策用語でもあります。それまでも言葉自体はあったようですが、社会に普及させる目的もあり、2014年頃から政策用語として使われるようになりました。この流れのなかで地方創生の政策に予算や人員が付いたことは、伸び率に影響しているそうです。なぜ、こうした政策が進められるのでしょうか。

学生G ● 農村の人口減少を解決するためでしょうか。

小島 農村側のメリットはそうですね。地方創生の大きな課題は、いかに人

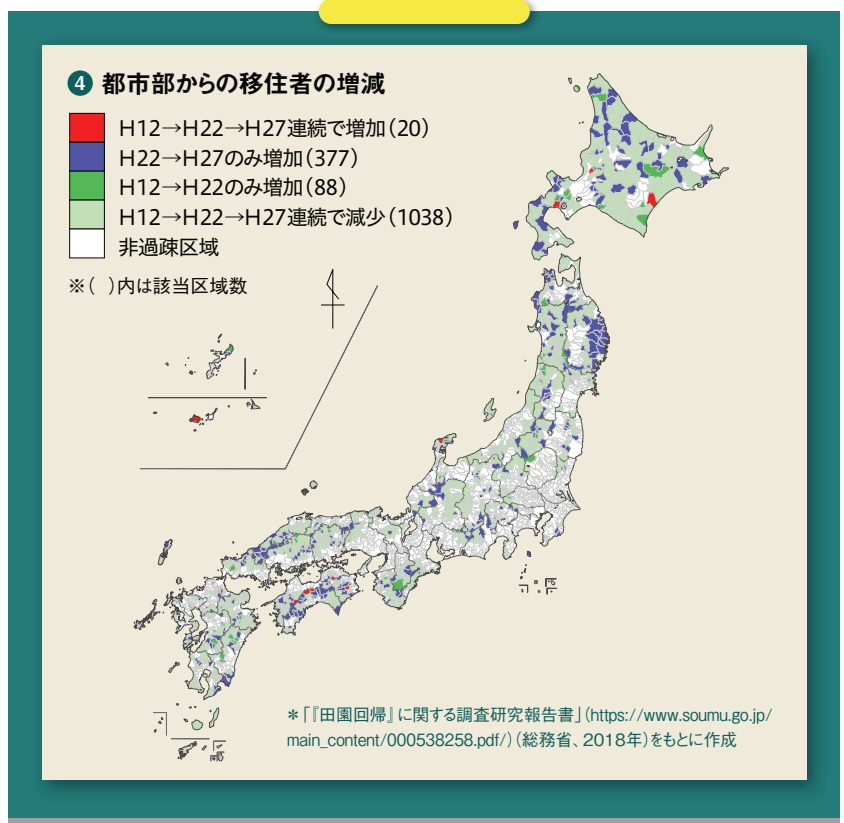
口減少を緩和するか。では、都市の人たちが相談に来る理由はなんでしょう。

②でも見たように、2005年から2014年で農村定住に関心がある割合が10%増えています。社会の農村への関心が高まった結果、相談者が増えるとも考えられます。

④は、日本の過疎農村への移住者数の増減を示しています。センターへの相談件数は増加しているとはいえ、これを見るとほとんどの農村で人口が減っています。移住者が増えたのは青色の部分。増えている場所に着目すると、いわゆる「田舎らしい田舎」なのです。

21世紀の農村の姿を考える

小島 島根県における、30代女性の人口増減に注目したデータがあります。島根県は、多くの場所が中国山地に覆われていて、「田舎らしい田舎」が多く、過疎化が日本の中でも比較的早く始まりました。2008年から2013年



⑤ 移住者が現住地を選択した理由

移住理由	全体	都市部から転居	30代
気候や自然環境の恵まれた環境	47.4	53.8	48.6
それまでの働き方や暮らし方を変えたい	30.3	35.7	32.4
都会の喧騒を離れた静かな環境	27.4	35.0	21.6
ふるさと(出身地)で暮らしたい	25.2	26.6	20.3
家族(配偶者、子ども、親)と一緒に暮らしたい	21.9	20.3	23.0
家族や親せきの近くで暮らしたい	21.2	21.7	16.2
アウトドアスポーツなど趣味を楽しむ暮らしがしたい	20.1	21.0	20.3
ゆっくりとした暮らし、自給自足の生活を送りたい	19.7	21.7	16.2
自分の資格やスキルを活かした仕事や活動がしたい	16.1	16.1	18.9
ふるさとではないが、なじみのある地域で暮らしたい	15.7	17.5	12.2
豊かな自然に恵まれた良好な環境の中で子どもを育てたい	13.5	11.2	23.0
都市地域より安くて広い土地や住宅が手に入る	12.8	15.4	10.8
新しい土地で新しい人間関係を築きたい	10.9	13.3	12.2
安くて安心・安全な食料が手に入るところで暮らしたい	9.5	9.1	9.5
農林水産業など都市地域ではできない仕事がしたい	8.8	9.8	9.5
自治体が実施する移住・定住の支援施策に魅力を感じた	8.0	8.4	6.8
メディアなどを見て、田舎暮らしに魅力を感じた	4.4	5.6	2.7
その他	6.6	4.9	9.5

*「田園回帰」に関する調査報告書(総務省過疎対策室、2017年)から抜粋し、作成。

のデータを見ると、30代女性の人口が増加傾向にあるのは全225地区のうち98地域。県庁所在地から離れた場所にも増えているのです。総人口は減少傾向なので、明るい未来ばかりを描けるわけではありませんが、半分弱の地域で、30代女性の割合が増加しているのは注目に値します。

なぜ、30代の女性が増えているのかには、明確な説明はされていません。代わりに、⑤は日本各地の過疎地域への移住者が、現住地を選択した理由のデータです。恵まれた気候や自然環境が理由の移住は全体の47%、都市部からの移住者では半数を超えています。

学生H●30代の割合が高い項目は、家族や子育てに関わる理由が多いですね。

小島 20代の頃は、東京などの都市部で就職する人が多いですが、東京の出生率はとても低いです。若者は集まるけれど、子育てが難しいのかもしれない。

学生H●意外に多いと感じたのが、スローライフや自給自足の生活への指向

です。昔に比べると現代の生活様式は快適だと思うのですが、昔の暮らしへの憧れを抱く人が増えているのかも。

小島 日本では多くの人が都市に居を構えるようになって、50年以上が経ち、ほころびが出ているのかもしれませんが。都市の暮らしは全てを満たしてくれるわけではない。家族との暮らしを大切にしたいけれど、都市の暮らしではそれが実現できないなど、都市生活への不満が読み取れます。

とはいえ、移住理由は一つではなくて、いろいろと考えながら自分の住処を選んでいる。そのときに、農村移住を選択する人が増えている状況を、現時点では「田園回帰」とみることができないのではないのでしょうか。

農村といっても、現代において農村での暮らしは多様です。移住後に農業をする人はいますが、農業のために移住する人は多くありません。「農村＝農業」ではない、新たな農村の価値を捉え直さないといけないと感じています。

最近では、感染症の影響で農村移住の動きが高まると言われましたが、実際には動きを加速する方向には動い

ていません。現代の人々が農村の価値をどのように受け止めているのかは、定まった内容を話せる段階にはまだないのが正直なところですよ。

私は農村研究者ですから、田園回帰の傾向を論理的に解明するのが仕事です。しかし、私に根付いているのはどうしても20世紀的な「農村＝農業」の感覚。21世紀を生きる皆さんは、農村に対する印象も違うはず。21世紀の農村は皆さんだからこそ、適切に解釈できるのだらうと思います。皆さんの目で、農村の新たな価値を描いてくれることを期待しています。



若宮淳志 教授

化学研究所

気候変動の原因となる温室効果ガスの排出、いずれやってくる化石燃料の枯渇などの課題に直面するエネルギー・資源問題。化石燃料に代わる新たなエネルギーとして期待されるのが、太陽光をエネルギー源とするペロブスカイト太陽電池だ。薄くて軽くて、曲げられて、曇りの日や朝夕の弱い光でも発電可能。凸凹した斜面、災害時のテント、スマートフォンや腕時計など、どんなものでも電源として利用できる可能性が期待されている。「どこでも電源[®]」を実現し、未来のエネルギー社会の変革を目指す若宮教授に、研究の現在地を訊いた。

わかみや・あつし

1974年、三重県に生まれる。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。名古屋大学大学院理学研究科助手、同大学物質科学国際研究センター助教、京都大学化学研究所准教授などを経て、2018年から現職。株式会社エネコテクノロジーズの取締役と最高科学責任者(CSO)を務める。研究室の看板は、教授就任時に卒業生有志から「この研究室より大きな看板を!」と贈られたもの。



大発見の鍵は〈現場主義〉にあり。 薄くて曲げられる太陽電池への熱い期待

地球規模の気候変動問題を解決するべく、世界的に動きが加速するカーボンニュートラル。実現の主軸となるのが、太陽光や風力などを利用した再生可能エネルギーだ。日本では、2050年に使用電力の50%を再生可能エネルギーにすることを目指し、様々な取り組みが推進されている。

なかでも、大きな期待が寄せられるのがペロブスカイト太陽電池。「フィルムや薄いガラスの上に、ペロブスカイト結晶構造を持つ化合物を塗布した太

陽電池で、薄くて軽くて、ぐにゃりと曲げることもできる。さらに、太陽光をエネルギーに変換する発電効率も高いのです」。そう語るのは、第一線で研究を進める若宮教授だ。

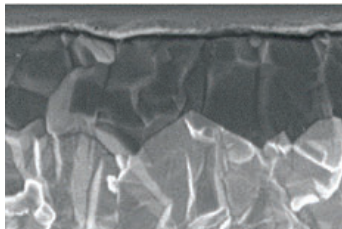
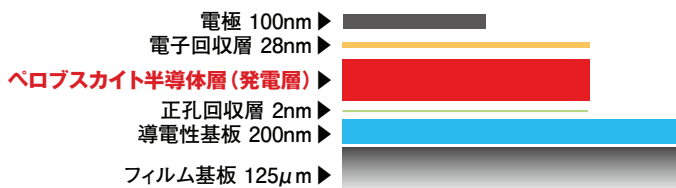
再生可能エネルギーの普及に向けて、日本各地に大型のシリコン型太陽電池が設置されているが、もともと日本は平地の少ない地形。既に国内の適地にはほぼ設置済みだという。「その他の広い場所といえば、工場の屋根やビル

年の日本の再エネ比率は約20%で、目標の半数に到達するにはこうした場所をどう利用するかが焦点。薄くて曲げられるペロブスカイト太陽電池は、その突破口になるはずだ」。

第二の研究人生の はじまりに掲げた目標

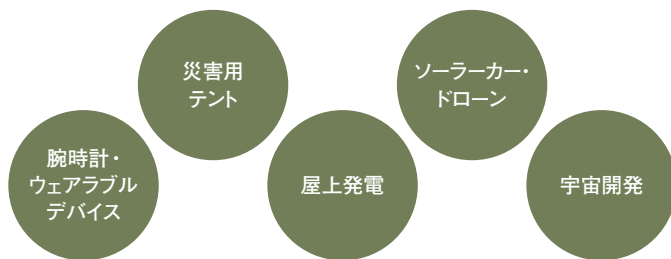
若宮教授と太陽電池との関わりは、2010年に遡る。それまで勤めていた名古屋大学を離れ、母校である京都大学への着任が決まっていた。「心機

● ペロブスカイト太陽電池の構造



ペロブスカイト層
厚さ600nm
毛髪の100分の1
程度の薄さ

● ペロブスカイト太陽電池の応用可能性



● 太陽電池の比較

シリコン太陽電池	従来型	長所	短所
ペロブスカイト太陽電池	次世代型	<ul style="list-style-type: none"> ● 発電効率が高い ● 耐久性がある(30年以上) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 重い、硬い、製造コストが高い ● 製造時にCO₂を排出する ● 廃棄コストが高い
		<ul style="list-style-type: none"> ● 軽量、曲げられる、製造コストが安い ● 塗って作れる(印刷技術) ● 曇天時や室内光でも高い発電効率 	<ul style="list-style-type: none"> ● 耐久性の向上が課題 ● 大量生産技術の開発が必要

一転、新たな課題に挑戦したかったのです。このときの私は35歳。残り30年の研究人生をどんな思いで過ごせれば、悔いなく終わられるだろうか。そう考えたとき、〈人のためになることをしたい〉と思ったのですね。

頭をよぎったのはエネルギー・資源問題。若宮教授が専門とする有機化学は、材料の合成時に石炭や石油由来の試薬を使うことが多い。「将来、化石燃料が枯渇すれば、『有機化学ってなに?』と、この分野が忘れられる世

界になるかもしれません。そうした面からも、石油に代わるエネルギーへの貢献は、私に取り組むべき仕事だと」。

そうして次世代太陽電池の研究を進めていた2012年に登場したのが、ペロブスカイト太陽電池だった。材料を塗布してものの数十秒で膜ができあがる手早さに衝撃を受け、可能性を感じたという。「しかし、あまりに再現性が低かったのです。同じ人が同じ条件で作っても、同じ発電効率を得られない。ときには発電効率ゼロの電池ができる

こともあり、世界中の研究者が頭を悩ませていました」。

当たり前を疑った先にたどり着いた発見

従来、電池材料の開発は無機化学の範疇。無機化学の世界では、高温での焼成が材料作製の主流で、液体を塗布するペロブスカイトはややイレギュラー。「一方で有機化学の分野は、液体を使う技術に長けています。空気に少し触れただけで性質の変わ

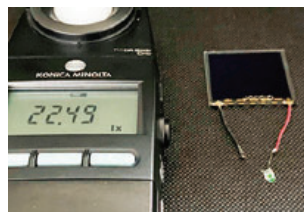


災害用テントにペロブスカイト太陽電池を設置。実証実験に成功

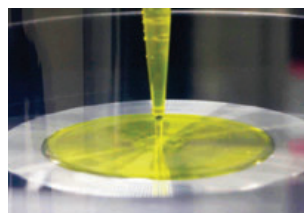
● ペロブスカイト太陽電池の特徴



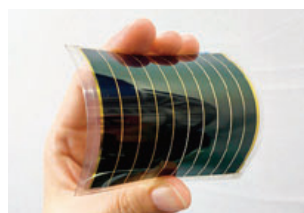
▶ **26.1%の高効率**
材料開発と塗布成膜技術開発により、国内でも最も早く20%以上の発電効率を達成。10年で従来のシリコン太陽電池に匹敵する発電効率に到達



▶ **低照度でも高効率発電**
晴天時だけでなく、曇り空や室内光の下でも相対的に高い発電効率を維持



▶ **低コストで製造できる**
塗布による低温プロセスであり、構成層がナノレベルの薄膜であるので製造コストが安い



▶ **薄膜・軽量・柔軟性に富み、多用途に使える**
超薄型ガラスやフィルムなどを基材にした、柔軟性のある軽量太陽電池が実現可能

open!

ラボに潜入!

できあがったばかりのペロブスカイト太陽電池モジュール



左／太陽光を模した光を当てて、ペロブスカイト太陽電池の発電効率を調査

右／酸素や水に不安定な化合物の実験に欠かせないグローブボックス。外気に一切触れずに作業ができる

る、繊細な試料の扱いもお手のもの。有機化学の視点を持ち込んで、いろいろな条件で実験しました。

鍵となったのは、基本材料であるヨウ化鉛に含まれていた水分だった。「高純度で不純物がないはずのヨウ化鉛を使っているのに、なぜか溶液に溶けきらなかった。一つひとつ原因を潰すように実験するなかで、有機化学の手法で脱水してみると、なんと試験管の中に水滴が現れたのです」。というのも、ヨウ化鉛は主に無機化学で使われる材料。焼成が中心の無機化学の世界では、作製過程で蒸発する水分はあってないようなものだった。「ですから、水分は不純物扱いをされず、純度表記にも記載されないのです。『高純度だから大丈夫』という前提を疑ったこと、そして分野が違う私たちの技術だからこそこの発見でした」。

脱水したヨウ化鉛で作った電池は、当時のペロブスカイト太陽電池最大の発電効率である13%を実現。安定性もクリアした。「『これはすごい』と、競争相手も含めた世界中の研究仲間に送りました。そのときのものすごい反響は忘れられません。今ではペロブスカイト太陽電池の標準材料です。特許を取得して、京都大学の知的財産として貢献しています」。

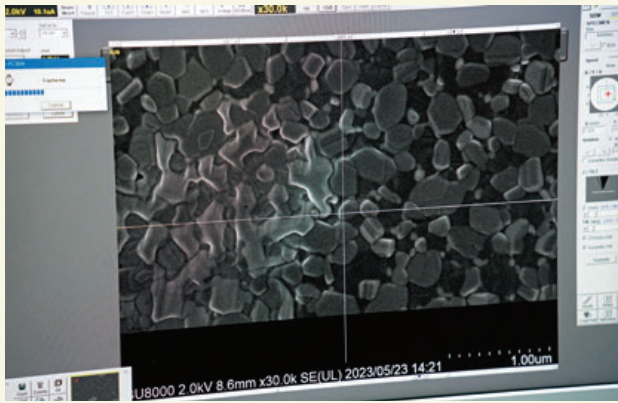
残す課題は電池の実用化・製品化

その後も、ペロブスカイト太陽電池の改良・改善につながる発見を重ねてきた若宮教授。「目指すゴールまでは、あと3割くらい。残すところは社会実装です」。2018年に京都大学の支援を受けて、大学時代の同級生だった加藤尚哉さんとともに、株式会社エネコー

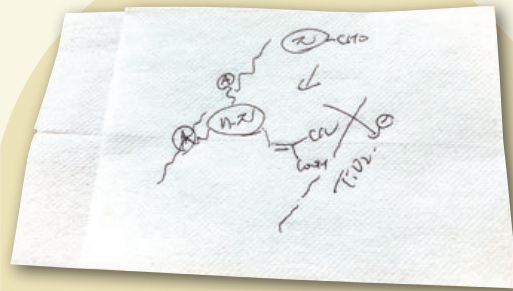
テクノロジーズを創業。大量生産に向けた製造スピードの改良など、実用化にあたっての課題を中心に、38名のスタッフが技術開発を推し進める。

実用化に向けて着実に歩むかたわら、大学では「〈クレイジー〉な研究を」と意気込む。「理屈で考えると、こじんまりとしたものにしかありません。遊び心を持って結果を眺めて、思いつきを試してみる。そうして生まれた新しい発見を、次のステップに連れていくのが私の役割です」。

そんな若宮教授が挑戦するのは「鉛フリー」の材料作製。昨今、人体への影響を懸念して、ヨーロッパを中心に鉛の使用や輸入が規制されつつある。若宮教授のもとにも、「鉛フリー」の太陽電池への要望が届くのだという。「私たちが使うのは^{スズ}鉛ほどの発電効率はまだ得られていませんが、難しい



できあがったペロブスカイト層は顕微鏡で確認し、表面のなめらかさをチェック



「四六時中、研究について考えています。そうすると、歩いているときやシャワーを浴びているとき、ご飯を食べているときなどにハッとアイデアが浮かぶことがあるのです。そんな時、近くにある箸袋や紙ナプキンに書き留めています。自分のアイデアだからこそ、研究は楽しいんです」



Sn(錫)系ペロブスカイト太陽電池セル

研究室で
ねほり
はほり

ということは重要な課題だということ。挑戦する意義を感じます」。

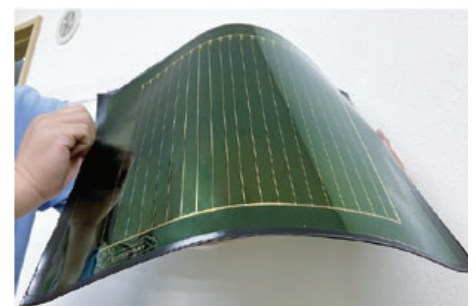
大学教授とCSOという二足の草鞋を履き、忙しい日々を送る若宮教授。しかし、どんなに忙しくても、ラボに足を運ぶ時間は惜しまない。「私は現場主義です。現象をこの目で見なければ、

研究は始まりません」。実験の現場で生まれる「なぜだろう」を前に、謎をひも解く時間こそが、若宮教授にとって研究の醍醐味だ。「研究は思い通りにいきません。恩師の小松紘一先生から言われたのは『実験に失敗はない』。仮説とは違う結果が出たのなら、それ

はそういう現象だと素直に受け取ることがスタート。現象を前に、材料や化合物と会話するのが実験化学です。この先もたくさん予想外に出会えることが楽しみです」。



大学の同級生だった加藤尚哉さんと、株式会社エネコートテクノロジーズを2018年に創業。「技術のことも経営のことも分かる人を探していたとき、投資会社や不動産関係の会社で働いていた加藤さんが頭に浮かんだのです。大学時代は「遊び尽くした」という若宮教授。「しかし、そうした中で培った友人関係や人脈が様々な場所で力になっています」



大面積のペロブスカイト太陽電池の作製を目指し、日々研究を重ねる

小 3で競技かるたを始めてから、かるたは私の生活の中心です。

大学時代の思い出も、思い返すといつもかるたと共にありました。

練習に通っていた京都小倉かるた会で、なにかと面倒をみてくださった京大生の皆さんに憧れて、京都大学に進学しました。入学後は、京都大学かるた会の部室で練習に励みながら、授業の時間割もみっちり埋めて、積極的に履修しました。思い出深いのはやはり和歌の授業。これまでは和歌を「音」として捉えていた私には、限られた文字数のなかにごめられた工夫や読み手の情感を知ることが驚きの連続でした。高校教師の道を選んだ現在は、古文を教えるたびに当時の感動が蘇り、同じ驚きを感じてほしくて、ついつい熱がこもります。

京大かるた部を初の団体優勝に導く

大学時代、なにより思い出深いのは、全国日本大学かるた選手権と、全国職域学生かるた大会での団体戦ダブル優勝です。もちろん、入学当初からの目標でしたが、2回生の頃、のちにかかるた名人となる^{くめはら}糸原圭太郎さんの入部が追い風となり、優勝への思いはさらに強くなり、練習は熱を帯びました。けれども、ライバル校の壁は厚く、あと一步というところで優勝を逃す年が続ききました。

転機は4回生の頃。「メンバー同士で日頃から話し合う雰囲気を作れば、もっと強くなれる」。練習中にチームメイトがつぶやいた一言が、私の意識を変えました。一人ひとりの実力が伸びれば自ずと勝利に近づくものと思い、



やまぞえ・ゆり

1991年、京都府に生まれる。2013年、京都大学文学部を卒業後、洛南高等学校国語科教諭として着任。かるた八段。2021年に競技かるたの日本一を決めるクイーン位決定戦で勝利し、第65期クイーンを獲得。2022年、2023年も勝利し、3連覇を果たした。

私を変えた

あの人、

あの言葉

どこを切っても 競技かるた一色の大学時代

山添百合さん

小倉百人一首競技かるた 第67期クイーン

個人練習に集中していたのですが、確かに団体戦では、事前に相手チームの戦略を予想して対策を講じたり、互いに声掛けができる試合中に、誰がどんな風に雰囲気を作るのかを考え

ることも重要なんです。この意識の転換がチームの結束を高め、優勝への道を拓いてくれました。

大学時代は時間があれば部室に通い、かるたが大好きな仲間たちと、

時間を忘れて、数えきれないほど対戦しました。そんな仲間を眺めることを楽しみに部室に通う部員もいたり……。

部室に満ちる自由な雰囲気が心地よかったです。京大全体にもそんな雰囲気が

ありました。大好きなかるたをもっと好きになれたのは、勉強でも研究でも、私のように部活でも、それぞれの好奇心や情熱を尊重しあって邁進できた京大だったからこそだと感じています。



団体戦での優勝は、京都大学かるた会の創部以来、初となる快挙。毎年、デザインを新しく考えるという、お揃いのユニフォームで試合に臨む



2度目の防衛戦である、2023年のクイーン位決定戦での試合。挑戦者を迎え撃つ心持ちで、堂々と試合に挑むことを心掛けているという



全ての学生が、学ぶ意欲を発揮できる大学に

京都大学のDEI(ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン)の取り組みを紹介する「京大 DEI ナビ」。今号は障害のある学生を支援する学生総合支援機構障害学生支援部門(DRC)を取り上げ、京都大学の考える障害のある学生への支援のあり方を伺いました。

学生たちの学ぶ意欲と 学ぶ権利を保障したい

村田 淳准教授 (障害学生支援部門)



京都大学では、障害のある学生を支援する専門部署として、学生総合支援機構内に障害学生支援部門(DRC)を設置しています。DRCとは、**Disability Resource Center**の略称。DRCの役割は、**社会や環境側が生みだす障害(社会的障壁/Disability)に対するアプローチをすること**です。

DRCの対応する範囲は、主に教育・研究を中心とした、大学としての本来の役割が対象です。そうした環境下において生じる障害(社会的障壁)について、専門的な知見やノウハウ、機器や技術等を用いてリソース(Resource)を提供(相談・支援)します*。

DRCは障害のある学生を「支援の対象」として考えているわけではなく、あくまで、「**学びや研究の主体者**」として捉えています。大学は良い支援を受けるための場所ではなく、自分らしい学びや研究を行うための場所。それは学生の皆さんの権利でもあります。**学生自身が主体的に学ぶ権利を保障したい、そのためのリソースを提供(相談・支援)することがDRCの目指すあり方**です。

そのために、DRCは学生の皆さんとの対話を最も重視します。学生自身がどのように学びたいと考えているのか、その意向をもとに様々なアプローチを模索し、それぞれの状況に応じて、どのようなリソースが活用できるのかを検討します。ときには、トライアル・アンド・エラーが生じることも少なくありませんが、その都度、個人的・環境的要因を評価しながら、より良い選択肢を見つけたいと考えています。

*学生生活の周辺の相談にも応じますが、内容によっては学内外の他機関を紹介する場合があります。

京都大学 DRC

Disability Resource Center

(学生総合支援機構 障害学生支援部門)

場所：吉田キャンパス本部構内

教育推進・学生支援部棟(旧石油化学教室本館)1階

TEL：075-753-2317

E-mail：drc@mail.assdr.kyoto-u.ac.jp

DRCでは個別相談・支援だけでなく、障害学生支援に関する各種のプロジェクトの実施、そして、多様なコンテンツを制作しています。所属する教員は、障害等に関する教育・研究にも取り組んでいます。

事例1

障害学生支援ガイドブック

京都大学における障害学生支援のシステムやDRCの紹介、各種障害に関する基礎的な知識・支援方法などを整理し、教職員に配布しています。実際に障害のある学生を支援する必要が生じた場合には、その都度、個別に相談することになりますが、社会的障壁を知る手がかりとして活用しています。



事例2

フリーアクセスマップ



従来のバリアフリー・マップとは、少し異なる視点で情報を表示するマップを配布しています。本マップは、主に車椅子利用者などの移動困難者の目線で作成したものです。従来のように道筋や設備の使用を限定して指示するものではなく、目的地までのバリア(障壁)を適切に表示することで、自らのスキルに合わせて道筋などを選択できるようにしており、名称も「フリーアクセスマップ」としています。

事例3

12key Accessibility Calendar



学内外の多くの方に手にとっていただき、身近な視点から理解啓発につながるよう、アクセシビリティ・カレンダーを作成・配布しています。カレンダーの裏側には、12の小さなエピソードを掲載しています。「何気ない日常の中で、少し立ち止まって〈他の誰かの何か〉にふと気づいてみる」。そんなきっかけ作りのために、取り組みを続けています。

各種のコンテンツは、DRCのウェブサイトで開催しています。

<https://www.assdr.kyoto-u.ac.jp/drc/contents/>



輝け! 京大スピリット

大きく弧を描きながら助走をつけ、遠心力の勢いを利用して地面を蹴った反発力で跳躍し、飛び越えたバーの高さを競う走高跳。自身の身長よりもはるかに高いバーを越え、2022年度の日本学生陸上競技対校選手権大会で学生日本一となったのが山中駿さんだ。

「バーを飛び越えられれば成功、バーが落下すれば失敗。その場ですぐに結果が分かる爽快さに惹かれました」。中学入学と同時に、友人に連れられてなりゆきで陸上部に入部。そこで走

高跳と出会った。「どンドンと記録が伸びるのが楽しく、気がつけば夢中でした」。中学・高校時代にも全国大会に出場し、頭角を現していたが、日本一にはあと一步届かなかった。「日本一をとるまでは辞められない。大学では必ず日本一を手に入れたと決めていました」。

山中さんが所属する京都大学陸上競技部では、100人を超える部員たちが切磋琢磨しながら練習に励む。「指導者はいませんが、部員同士で意見を交わしながら練習しています。仲間の記録が伸びると、私も頑張ろうと気持ちも鼓舞されます」。技術を磨き、記録は高校時代から10cm以上も伸びた。着実に力を付ける一方で、大会ではなかなか芽が出ない時期が続いたという。「走高跳は3回連続で失敗すると、そこで競技終了です。安定して高い確率で目標の高さを成功できるようにならないと、優勝への道は拓けません。いつも通りの力を発揮すれば優勝できる、そう思えるまで動きを身体に覚え込ませたことが優勝の決め手でした」。

自己ベストである2m22cmのバー。180cmの山中さんの身長と比べてもかなりの高さ



目標記録に挑戦する記録会にて

走高跳には、助走、踏み切り、空中の3つの動作があり、それぞれに異なる技能が必要。山中さんが得意とするのは踏み切りだ。「足裏が地面に触れる時間をできるだけ短くして、もう一方の脚を素早くスイングさせるのがコツです」。

自己ベストは2m22cm。関西地方学生記録の2m25cmまであと3cmに迫った。「走高跳に打ち込めるのは、大学院修了までの残り3年。2m26cmを飛び、記録更新することが一番の目標です。日本選手権や世界大会にも挑戦の幅を広げて、記録を残したい」。

優勝してなお、野心に満ちあふれる山中さん。バーを見上げるその瞳は、既に次の高みを見据えている。

***京都大学総長賞**
学業・課外活動・社会貢献活動等において顕著な活躍をした学生及び学生団体を表彰する賞。



踏み切る左脚に鍛錬の成果を込める。全身の躍動が生み出す新記録

令和4年度京都大学総長賞
山中 駿さん (工学部3回生)

抜けるような青空の下、枝をアーチ状に組んだ草葺きの小屋には、雨期対策の布がパッチワークのように被せられている(写真下)。ボツワナの狩猟採集民であるブッシュマンが暮らす住居だ。「調査では小屋の側にテントを張らせてもらいました。飼われている山羊に踏まれて目が覚めたことも(笑)」。写真を見ながら楽し気に語るのは杉山由里子さん。2023年に第15回京都大学たちばな賞の優秀女性研究者奨励賞を受賞した新進気鋭の

研究者だ。

日本では京都大学を中心に50年以上の蓄積があるブッシュマン研究。杉山さんは手付かずだった死生観というテーマに挑む。聞き取りを重ねるなかで見えたのは、遊動生活と吊いの関係だった。かつてカラハリ砂漠を自由に移動しながら生活した古老が、心地よいクリック混じりの言葉で



毎朝日課のティータイムは、調査の合間のご褒美



手に持つのはブッシュマンが作る民芸品。彼らの貴重な収入源だ

誰もが抱く死と向き合う難しさ。ブッシュマンの歩みに未来の鍵を探る

第15回京都大学たちばな賞 優秀女性研究者奨励賞（学生部門）
杉山由里子さん（アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）

語る。「私たちは昔、死んだ人を埋葬し、移動した。そんな風に死んだ人のことを諦めて、忘れたの。私たちは埋葬して、そして草の中を歩いて歩いて……。ああ鳥がコロコロと鳴いているねって話しながら。こうやって悲しい気持ちと一緒に、死んだ人を砂に預けたのよ。計300分以上にわたる聞き取りから、杉山さんは次のようにブッシュマンの死との向き合い方を分析する。「狩猟採集民である彼らには葬儀の慣習はありませんでした。それでも死者とともに生きていると誰もが感じています。その感覚を胸に、この世界で生きる決意を固めて次の居住地へと歩いてゆく、それが

彼らの死との向き合い方なのです」。

1964年のボツワナ独立以後は、国家のマジョリティである民族・ツワナが主権を握る政府によって定住化政策が進められ、ツワナ式の葬儀文化が流入。エイズの蔓延や若者の自死の増加などもあり、死を取り巻く状況は大きく変化している。「現在の彼らは仲間の死に際してかつての生活の喪失も実感しています。自由に移動できない現状に抱く不満も、調査では掬い上げました」。

研究テーマに死生観を選んだ背景には、小学生の頃に身近に経験した、死傷者が出た痛ましい事件のショックがあった。進学するにつれて記憶を共

有する人が減り、ひとり思い悩むようになるなか、異なる吊い方を受け入れるブッシュマンに強く興味を惹かれた。「死とどう向き合えばよいのかという疑問は誰もが少なからず抱えているはず。私たちの現実とつながる仕方で、彼らを理解したいと思いました」。

土地の所有権を主張するために「祖先」の概念を取り入れるなど、ブッシュマンの死生観は驚くほど柔軟に変化を続ける。「コロナ禍で従来の葬儀ができずに悔しい想いをした遺族がいるように、死の在り方がいつ変容するかは分からない。人類の『過去』を知る鍵として注目されてきたブッシュマンですが、その柔軟さは『未来』のヒントになるはずだ」。杉山さんの言葉に、爽やかな熱い風が吹き抜けた。

*京都大学たちばな賞

学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成等に資することを目的に創設。優れた研究成果を挙げた若手の女性研究者を顕彰する。



『紅萌』ウェブサイトも公開中

下記のアドレス、またはQRコードからアクセスできます。

www.kyoto-u.ac.jp/kurenai/



編集後記

巻頭鼎談では、寄附講座を通じて支援いただいている企業トップをお招きし、変化の時代を生き抜く経営の実践例やヒント、産学連携や本学に寄せる期待などをお話いただきました。

また、表紙を飾ったのは、次世代型太陽電池として期待されるペロブスカイト太陽電池。社会実装を目指す化学研究所の若宮淳志教授に登場いただき、研究開始当初の秘話や将来の展望などを紹介しています。

新型コロナウイルスによる行動制限も緩和され、大学にも活気が戻ってきました。これからも、それぞれの分野で躍動する教員や学生の姿をお伝えしていきます。

2023年9月
京都大学広報委員会
広報誌企画専門部会

京都大学基金事務局より

創立125周年記念事業のご報告

2022年6月に京都大学は創立125周年を迎えました。記念事業では「国際競争力強化」「研究力強化」「社会連携推進」の3事業を展開し、新たな知イノベーションの創造、次世代を担う人体育成などに取り組んできました。各事業内容の一部をご紹介します。

国際競争力強化——グローバルリーダーの育成

留学生育成プログラムである Kyoto iUP の留学生への奨学金の創設、大学院生を対象とした海外渡航助成金の拡



京都大学とオックスフォード大学のラグビー部による記念試合

充、交換留学支援、大学院レベルの留学生に対する経済支援、さらに海外大学とのスポーツ交流試合などを実施しました。

研究力強化——次代の〈おもろい〉若手の育成

コロナ禍における緊急学生支援プランとして授業料免除の拡大、次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」をはじめとする若手研究者の活躍の場の拡充と研究費の面から支援する学内ファンド

京都大学同窓会だより

第18回京都大学ホームカミングデイの開催

今年度のホームカミングデイは、実地とオンラインのハイブリッドで開催する予定です。実地開催は2023年11月4日(土)のみ、オンライン開催の公開期間は、11月4日(土)(予定)から11月30日(木)までです。ホームカミングデイは、本学同窓生やそのご家族、一般の方との交流を目的として、実施しています。

実地開催では、万城目学氏による講演のほか、複数の音楽系サークルの音楽会、学内施設見学、スタンプラリー等を予定しています。オンラインでは、講演と音楽会のオンデマンド配信に加え、動画コンテンツとして、京都大学白浜水族館の動画や懐かしい京大の生協食堂の紹介ビデオ、過去コンテンツのアーカイブ等を検討しています。



「くすのき・125」の展開、URA体制の強化などを行いました。



白眉研究者による年次報告会

社会連携推進——京都アカデミズムの創造発信

産官学連携の新しい「京大モデル」の構築に向けたマッチングイベントの開催や情報発信の強化、起業人材の裾野の拡大から起業後の資金調達のためのメンタリングを含めたアントレプレナー教育、本学の研究成果の起業による事業化推進を目的とした「起業支援プログラムIPG-Advance」などを実施しました。



起業家的精神に資する異能の育成を目的としたプログラムでの展示会

各事業の詳細な報告は、今後、京都大学基金Webサイトにて掲載する予定です。

<https://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/>



お問い合わせ先

京都大学基金事務局 TEL : 075-753-2210

詳細は、9月に京都大学同窓会ホームページにてご案内します。ご家族・懐かしいご友人へご周知の上、是非ご参加・ご視聴ください。
<https://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/>

新たに入会された同窓会

2023年3月「京都大学iUP同窓会」／4月「京都大学奈良県同窓会」／5月「三重京大大会」

京都大学同窓生向けサービスKUON

在学生と卒業生、教職員の方を対象に、同窓生向けサービス「KUON」を運用しています。ご登録いただいた皆様限定の優待特典をお届けするほか、ご希望の方は京都大学ドメインのメールアドレスを利用できるサービスもあります。ぜひご登録ください。

<https://www.alumni.kyoto-u.ac.jp/>



京都大学広報誌 紅萌 第44号
2023(令和5)年9月15日発行

編集 ● 京都大学広報委員会 広報誌企画専門部会
発行 ● 京都大学 渉外部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2071
URL <https://www.kyoto-u.ac.jp/>
E-mail kurenai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
制作協力 ● 京都通信社 デザイン ● 中曽根デザイン

『紅萌』は、次のURLで閲覧できます。

WEB版 <https://www.kyoto-u.ac.jp/kurenai/>

PDF版 <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kurenai/>

©2023 京都大学 (本誌記事の無断転載・放送を禁じます)

アンケートに答えると「総長カレー」を抽選でプレゼント!



下記のQRコードを読み取り(もしくはURLを入力し)、専用フォームにアクセスしてください。ご協力いただいた方の中から、抽選で10名様に「総長カレー」をプレゼントします。応募の締め切りは2024年2月16日(金)です。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



URL <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kurenai/enquete>